陳望道《修辞学発凡・第五篇》訳注（下）
付録：霍　四通「双関、引用など五種の辞格研究の展開」

甲　斐　勝　二（執筆代表者）*

前書き

先回に続き、陳望道『修辞学発凡』第五篇の後半部分訳注を以下に掲載する[*1]。本訳注の文章表現に関する責任はとりまとめを行った甲斐が負う。海外からは復旦大学中文系の霍四通先生が今回も一文を寄せてくださった。

ここに訳注を掲載する『修辞学発凡』は中国における修辞学研究史における金字塔であることは論を俟たない。しかしながら、その初版ができあがった1932年から既に多くの年月が過ぎており、もはや古典化したと言えよう。近年の修辞技法に対する各種研究は、各種の言語現象の解明の方法と関係し、旧来の修辞学の領域を超えて、様々な言語理論を使っての研究が進んでいるようだ。今回中国の修辞学研究の近況について、復旦大学で修辞学を研究する霍四通氏が一文を寄せてくださったが、そこでは言語学の新視点から研究が進められている様子が示されている。篇末に付録として訳出したので、参考にしていただきたい。

今回訳出した部分でも、前回同様、各修辞技法の解説に引かれる文例は、漢魏六朝期の楽府作品から現代文に到るまで、幅広い時代の幅広い形式の作品からとられている。陳望道が編集に関わった民国当時の中学生のためのいわゆる語文教科書『開明国文講義』[*2]をみると、第一冊の第一篇に当時の作家孫福熙の「我艙房」、第二篇に唐の韓愈の「画記」、第三篇に「美猴王」（西遊記）と続いており、古文と現代文、文言と白話といったものへの対応の差があまり感じられず、その文章観は『修辞学発凡』と類似する。陳望道が考えていた「文章」とはかなり広いものであったことが分かる。これは当時の中国知識人の文章観の反映でもあるのだろう。

かかる各種各様の引用文に対してこの翻訳では、先回同様既に日本で翻訳がありその翻訳が訳文の文脈に沿うものであれば、それを使わせていただいている。訳文が見つからないときには、こちらで訳出したが、先述の通り引用される文例は現代語から白話・文言など様々な時代や文体に富み、こちらの知識不足・実力不足のために不十分な所や誤訳も多いと思われる。注釈については本文の理解の手助けになるようにと努めたつもりだが、『鏡花縁』の訳文のように読者に一定の古典知識が必要な部分もでている。注釈の付け方の未熟さや訳文の誤りなど、ご指正をお待ちしたい。

なお、翻訳は上海教育出版社版の『修辞学発凡』（1976版に基づく）によっている。このほかに復旦大学出版社版からも出版されていて（1962版に基づく）、両書では引用文例に大きな違いがみられる。しかしながら、修辞技法の分類やその解説が異なるわけではないので、陳望道が確認したはずの最後の版に従うことにした。霍先生もそれでよいとのことである。修辞技法の説明のために引用される文例など、改訂当時の社会状況に対応して入れ替えているものと思われるが、その理由までは調べていない。

詩文など原文を引いた方が良いと思われるものは訳文の近くに添付するか、脚注に付けた。ただし、表記漢字については概ね現代日本の漢字を使っている。原文の提示においては、現代中国の表記法にならい簡体字で書くべきか、或いは出版当初の繁体字で記すべきかあれこれ迷ったが、問題となっているのが漢字の字形でないのな

---

* この訳注の作成においては、間ふさ子（人文学部）・霍四通（復旦大学）・羽田ジェシカ（本学非常勤講師）・甲斐勝二（人文学部）・張璐（本学非常勤講師）・王毓雯（本学外国語講師）の5名が共同研究者として参加し、原稿は甲斐が整えた。（名前はアルファベット順）

*1「第五篇訳注（上）」は福岡大学研究部論集A：人文科学篇 Vol.11No.2 2011 12 に掲載。

*2『開明国文講義』：夏丏尊・葉聖陶・宋雲彬・陳望道合篇・開明函授学校出版・開明書店印行 民国23年11月初版。

ら、日本の漢字体で大きな不都合はないと考えたからである。文章のレイアウトなど、読者の便を計りこちらで整えた所もある。ご了承願いたい。

『修辞学発凡』第五篇訳注　（下）

七　双関

双関とは一つの言葉を二つの異なる事柄に関連づける修辞技法[*1]である[*2]。例えば，劉禹錫の「竹枝詞」[*3]のようなものだ。

楊柳は緑繁く江は静かにながれる
　楊柳青青江水平
江上に君の歌唱う声が聞こえくる
　聞郎江上唱歌声
東では太陽が顔を出し西では雨模様のありさま
　東辺日出西辺雨
つまり晴れてはいないが晴れてもいるというもの[*4]
　道是無晴還有晴

この「竹枝詞」中の「晴」の語が双関語である。この語は、まずはその前の句の「東では太陽が顔を出し西では雨模様のありさま」を受けて、晴雨の「晴」の意味を伝える。これは言葉通り（文字面の意味通り）に「つまり晴れてはいないが晴れてもいるというもの」という内容になるのだが、その一方で、二句めの「江上に君の歌唱う声が聞こえ来る」にも関連していて、情感の「情」にも掛けられている[*5]。その表現意図（つまり伝えたいこと）に従えば「冷たいようにみても実は愛情がある」という意味になるのだ。これまでの評注の通例に従ってこれを図示すれば次のようになる。

楊柳青青江水平，聞郎江上唱歌声
　楊柳は緑繁く江は静かにながれる、
　江上に君の歌唱う声が聞こえくる
東辺日出西辺雨，
　東では太陽が顔を出し西では雨模様のありさま
道是無晴還有晴。
　つまり晴れてはいないが晴れてもいるというもの

竹枝詞の例からわかるように、「晴」の文字が双関の対象にする二つの事柄には、内容上は主従の区別がある。例えば目前の事物「晴」は実のところは「従」であり、心情をいう意味の「情」が本当は「主」なのである。しかし、言語表現からみれば、そこには主従の差はなく双方に関連する。形式的には平行する双関となるのだ。

双関という修辞法[*6]は、形式では析字法[*7]の中の借音の析字とよく似ているが、内実が違う。なぜならば、借音はある音を借りて別の意味を表そうとするもので、二つの事柄共々に結びつく意味は持たないからだ。内実といえば起興[*8]とよく似ているが、形式が異なっている。なぜならば、起興法では起興となる言葉が先に置かれるけれども、こちらは後に置かれるからである。

謝榛の『四溟詩話』[*9]（巻二）では以下のように述べている。

昔の表現に次のようなものがある。「黄檗春に生え、苦心は日に従い成長する」、また「霧露芙蓉を隠して、蓮をみるもはっきりしない」、また「石闕が口中に生じて、碑を口に含んで語ることができない」、また「菖蒲花は可憐というが、名を聞くばかりでみたことがない」、また「桑蚕は繭を作らずに、昼夜長く糸を懸ける」、また「糸を整えて壊れた機織り機に入れても、なんで悟ろうか匹をなさないことを」、

---

*1 修辞技法：原文は「辞格」、ここでは修辞技法と訳している。
*2 日本での古典詩文の解説では「掛詞」として解説される表現法。
*3 劉禹錫「竹枝詞」：劉禹錫は中唐の詩人。「竹枝詞」は民間歌謡の形式にならって作ったもの。
*4 この句双関の意味として本文以下の解釈のように「さりげなく聞こえるようだが恋人に向けた心情が込められる」となる。
*5 晴（qíng）は情（qíng）と同音（ローマ字表記は、現代漢語普通話･拼音表記に基づく）。情は「情愛」の情。なお、訳文「言葉通り」の原文は「言陳」,「表現意図」の原文は「意許」。
*6 原文「辞格」、修辞法のこと。以後修辞法と訳す。
*7 原文「析字格」:析字格は、この後に第七篇積極修辞三に登場。析字格には各種あり、「借音」は単純に音を借りたもの。陳望道は「**这**菜一定是**鱼**，取富**贵**有余的意思（この料理は必ずや魚（yu）で、これは富貴に余（yu）りありの意味です）」というように、「魚」の語を同音の「余」にかけ、そこから「富貴に余（yu）りあり」を連想させようとするようなものだという。）
*8 起興：古代詩集の『詩経』や今でも民間歌謡などでよく使われる技法。意味や音で関係する語句を最初に挙げて，以下に唱う内容を連想させる方法。ただし、『修辞学発凡』には辞格としてみない。
*9 謝榛の『四溟詩話』：謝榛は明代山東の人、号は四溟山人。詩話が引用する詩句については以下の通り。
「苦心は日に従い成長する」（苦心は黄檗の木の苦い芯と苦しい心に掛ける。呉声歌曲・子夜四時歌）
「霧露芙蓉を隠して、蓮をみるもはっきりしない」（芙蓉は夫容に、蓮は憐に掛ける。呉声歌曲・子夜歌）
「碑を口に含んで語ることができない」（碑は悲に掛ける。）
「菖蒲花は可憐、名を聞くばかりでみたことがない」（菖蒲の花で美人に喩える）（『玉台新詠』・烏夜啼）
「桑繭を作らず、昼夜長く糸を懸く」（竹枝詞　糸と思をかける）
「糸を理して残機に入るるも、なんぞ悟らん匹をなさざるを」（子夜歌・糸に思をかける）
「桐の枝に花を結ばさざれば、何によりてか梧子を得ん」（梧子に吾をかける））
「荷を殺るも藕を断たず、蓮心すでに復た生ず」（読曲歌・蓮心は憐心・恋心に掛ける）。

また「桐の枝に花が咲かないのであれば、何によって梧子を得られよう」、また「荷を殺(か)ったが藕を断たないので、蓮心はもう再び生まれている」等というものだ。以上のものはみな呉格[*1]であり、指事借意（物事を指して心情を借りる）なのだ。

「指事借意」の語は、確かにこの修辞法を正確に説明している。しかし、これを「呉格」と言い切ってしまうと、呉声歌曲[*2]のいくつかの例に影響を受けすぎていると言わざるを得ない。

指事借意となる双関語は、別に呉の地方特有のものではなかったし（もちろん決して中国に特有のものだというわけでもない）、このことを以前誰も知らなかったわけでもない。例えば李調元の『雨村詩話』[*3]（十三）ではこう言っている。

詩には文字に借りて気持ちを託す技法がある。広州のはやり歌に、「雨の中でも蜘蛛は網を張る、ただ晴れを願って暗い中に糸を掛けるばかり」とある。ここでは晴の語音に情の意味を託し、糸の語音に思の意味を託すのだ。

ここに引用される広東の歌謡がまさにこの修辞法なのである。さらに梁紹壬『両般秋雨盦随筆』[*4]（六）ではこう言っていた。

粤（広東）地方の習俗は歌を好み……その言葉は双関が多い。

そこに引用される広東の歌謡の中にもまさしくこの修辞法がある。しかし、実際上は『楽府詩集』[*5]の呉声歌曲中でこの修辞法を用いることが最も多く、また呉声歌曲がこの修辞法を最もよく使うために、文人たちの注意と模倣を導いたのである。したがって、李調元のようにこの修辞法が「呉の修辞法」ではないと知っている人物でも、やはりそれは「楽府閨怨体である」ということになるのだ。

このような修辞法の成立には、語音が目の前と心の中の二種類の事柄に結びつくことが必要条件である。重点は語音にある。双関の作用をする語音は、表出すべき事を明快に示す言葉の音と同じか類似している。従って、この修辞法の例は、歌謡や芝居などの語音に重点が置かれる言語表現の中にしばしば現れる。

文字の形やその字義が類似しているかどうかについては、本来問題にはならない。しかし、分析のために有益なので、仮に字形や字義も考慮に入れて考察してみよう。双関語がその主意を表す言葉とどのような関係を持つかについては、以下の三種に分けることができる。

（1）音が同じ
（2）音、形が同じ
（3）音、形、義が同じ

この中で（1）（2）の二種は歌謡に多くみられ、（3）の場合は講談・小説・戯曲に多くみられる。これらを2類に分けてみよう。（1）（2）の2種は、表現される事柄とは別に他の気持ちを裏側に含ませているので、表裏双関と呼び、（3）の場合は一つの意味で明らかに彼方とこちらの二つの事柄を指しているので彼此双関と呼びたい。

一　表裏双関

（甲）ただ語音が類似するだけのもの

（一）風雨激しくつのる日、私は范愛農を想う
白髪あたまの毛も抜け落ちて
まばらになってはいるけれども
傲然と構えて，俗物どもを鶏虫のように
冷ややかに眺めていた[*6]

（魯迅「哀范君三章」）

「鶏虫」は杜甫の「縛鶏行」:「鶏と虫との利害関係が完全な解決を得るときはどうもなさそうに思われ、私は山ぞいの二階屋にたたずんで冬の大川の面をじっと見つめるばかりであった[*7]」にみえる。ろくな価値のない鶏や虫等を使って、権力闘争に熱心な蔑むべき人物を喩えるのである。当時、中華自由党[*8]の執行責任者は何幾仲

---

*1 呉格は「呉の地方の修辞法」、指事借意は、物事を指し示しそれを借りて本来の気持ちを表現すること。
*2 呉声歌曲:かつて呉の地（江南）に伝わっていた民間歌謡。男女の情愛を唱うものが多く、六朝の抒情小詩・唐代の絶句に影響を与えた。この歌曲には相関表現が多くみられること、この後の引用の楽府から見て取れる。
*3 李調元『雨村詩話』:李調元は清代四川の人、乾隆年間の進士、号は雨村。『雨村詩話』は未見。
*4 梁紹壬『両般秋雨盦随筆』:梁紹壬の挙げた例の歌謡には「日中間出四邊雨，記得有情人在心：太陽が真ん中に出て周りは雨が降っている、心の中心に情人がいるのを忘れない」「一樹石榴全著雨，誰憐粒粒涙珠紅：ザクロの木が雨にぬれている、誰が一粒一粒の赤い涙の珠（累珠・連なったザクロの実）を大切にするのだろうか）」等がある）。
*5『楽府詩集』:宋・郭茂倩編。以下に陳望道が引用する楽府は、ほとんどがこの書よりの引用。以下引用楽府の詩句解釈は『古楽府』(小尾郊一・岡村貞夫訳注 S.55 東海大学出版会）や『六朝詩選俗訓』（都留春男・釜谷武志校注　2000 平凡社・東洋文庫 666）に掲載のものはそれに寄っている。
*6 翻訳は『魯迅全集』９巻による。原文は「風雨飄揺日、余懐范愛農。華顛萎寥落、白眼看鶏虫」
*7 翻訳は岩波文庫『杜甫詩選』（黒川洋一編 1991）による。原文は「鶏虫得失無了時、注目寒江依山閣」
*8 中華自由党：民国元年にできた政治結社の一つ。当時何幾仲は范愛農がいた紹興の支部幹部。

であった。彼は、范愛農を閉め出したため、范愛農から軽蔑されていた、よって白眼で鶏虫をみるといったのである。鶏虫とは「幾仲」の類似音[*1]であり、ここでは一語による双関法を使っているのである。

（二）ああ悩ましき－石闕は昼夜を題を表し、碑文は泪して常に乾かず[*2]。

（華山畿）

（三）いかんせん－石闕は口中に生じ　碑を銜んで語るを得ず[*3]。

（読曲歌）

「題」には「啼」の意が隠され、「碑」には「悲」の意が隠される。「題」「碑」が本文表面の意味に結びつくと共に、さらに「啼」「悲」の意味がその始めの句につながってもいるのだ。

（四）言うべからざるをいかんせん－朝に牛の跡を看る、これ宿蹄の痕と知る[*4]。

（読曲歌）

「蹄」「啼」が表裏の双関である。

（五）穀衫両袖は裂け、花釵鬢辺に低し。何れの処か、分別して帰らん、西上古餘の啼[*5]。

（読曲歌）

「啼」と「隄」が表裏の双関である。この歌では詩情本来の「啼」の意味で上句を受けるので、先述の例とはいささか違っている。

（六）簾を垂らして　煩熱に倦み、幌を巻きて、清陰に乗ず。風は吹く合歓の帳、直に動かす相思の琴[*6]。

（王金珠「子夜夏歌」）

「琴」「情」が双関である。

（七）今夕已に歓と別れる、合会は何れの時にか在らん。明燈は空局を照らし、悠然として未だ期あらず[*7]。

（子夜歌）

「期」と「棋」が双関である[*8]。

（八）手を執りて歓と別れ、去らんと欲して情は忍びず。余光は己が藩を照らし、坐ろにみる離日の尽きるを[*9]。

（読曲歌）

「離」が「籬」に双関する。

（九）頭を仰げて桐の樹を看る、桐の花は特に可憐なり。天に願う霜雪のなく、梧子の千年を解くせんを[*10]。

（子夜秋歌）

「梧」が「吾」に表裏の双関である。

（十）歓の相憐れむ、心を題げて共に泣血す。頭を梳り黄泉にいり、別れてふたつながら死計をなさん[*11]。

（読曲歌）

「計」が「髻」に双関である。

（十一）歓にあらざれば独り慊慊、我が意はまた駆駆。双灯は俱じ時に尽く、ふたつながら由（油）なきをいかんせん[*12]。

（読曲歌）

「由」「油」が双関である。

（十二）面を闊ざけ行いは情に負く、我を詐くは言に端的。背に画きて天の図をなす、子はまさに星歴に負く[*13]。

（読曲歌）

「星」と「心」が双関である。

最も流行したのは、芙・蓉・蓮・藕と蚕・糸・布・匹の語で双関を作るものだ。しかし、匹の場合は後の項目に入れねばならない。

---

*1 鶏虫とは「幾仲」の類似音：「鶏虫（jīchóng）」・「幾仲（jīzhòng）」。なお、1962 年版に基づく復旦大学出版社版では、これ以後の用例文にかなりの違いがある。この魯迅の詩の用例はなく、（２）の「華山畿」より始まっている。
*2 原文：将懊悩―石闕昼夜題、碑泪常不燥。題・啼は中古音同音、碑・悲は中古音同韻声母同類。
*3 原文：奈何許―石闕生口中、銜碑不得語。脚注５参照。
*4 原文：奈何不可言―朝看莫牛跡、知是宿蹄痕。蹄・啼は中古音同音。
*5 原文：穀衫両袖裂、花釵鬢辺低。何処分別帰、西上古餘啼。古餘啼：「古餘」は地名として理解。「西上古餘啼 / 隄」で「（別れる場所の）西の古餘にて泣く」「（別れる場所は）西の古餘の隄」の二つの意味を持つ。啼・隄は中古音同韻声母同類
*6 原文：垂簾倦煩熱、巻幌乗清陰。風吹合歓帳、直動相思琴。琴・情は類似音おそらく方言音では近似。
*7 原文：今夕已歓別、合会在何時。明灯照空局、悠然未有期。期・棋は中古音同音。
*8 この部分、「悠然」は「油燃」の類似音で、最後の句は「油燃未有棋」（灯火の油は燃えても碁に相手はいない）を導く相関法との指摘もある。『漢魏六朝楽府詩評注』（王運熙 / 王国安評注・斉魯書社）参照。
*9 原文：執手与歓別、欲去情不忍。余光照己藩、坐見離日尽。離・籬は中古音同音。
*10 原文：仰頭看桐樹、桐花特可憐。願天無霜雪、梧子解千年。梧・吾は中古音同音。
*11 原文：歓相憐、題心共泣血。梳頭入黄泉、分為両死計。計・髻は中古音同音。
*12 原文：非歓独慊慊、儂意亦駆駆。双灯俱時尽、奈許両無由。由・油は中古音同音。
*13 原文：闊面行負情、詐我言端的。画背作天図、子将負星歴。星・心は中古音声母同じで類似音。

（十三）九州の池を堀りて作るは，尽く是れ大宅の里。処処に芙蓉を種ゆるがゆえに、婉転として蓮子を得る[*1]。

（子夜秋歌）

（十四）江南に蓮花開く、紅の光は碧水を覆す。色は同じ心もまた同じ、藕は異なるも心は異ならず[*2]。

（梁武帝「子夜夏歌」）

（十五）罷め去って四五年、相い見いて故の情を論ず。荷を殺しても藕を断たず、蓮心已に復び生ず[*3]。

（読曲歌）

（十六）青荷は緑水を蓋し、芙蓉は紅華を被る。下に根を並ぶる藕有り、上に頭を並ぶる蓮生ず[*4]。

（青陽度）

「芙蓉」は「夫容（夫の容貌）」に、「蓮」は「憐」に、「藕」は「偶」に各々双関する。

（十七）白帝城辺風波足る、瞿塘五月誰れか敢えて過ぎる。荊州麦は熟し繭は蛾と成る、糸を繰れば君を憶いて頭緒多し[*5]。

（李白「荊州歌」）

（十八）偽の蚕化けて繭を作る、爛漫（きれぎれ）て糸を為さず。徒労獲るところなく、養蚕何を持ちてなさん[*6]。

（採桑度）

「糸」と「思」が双関である。

（乙）音と形は同じだが、文中での字義は異なり、意味において双関するもの。

（十九）かの三春を看破（あきらめ）れば、桃紅柳緑を如何に待せん。この韶華を打ち滅し、かの清淡天和を求めん[*7]。

（『紅楼夢』第５回」）

「三春」は暮春の時節と元春・迎春・探春三人の境遇に双関する。

（二十）娘の喜しき容貌をみる、願わくば金蘭を結ぶことを得ん。空しく織りて経緯なく、匹を求むるも理は自ずから難し[*8]。

（子夜歌）

（二十一）春桑葉を傾け尽くし、夏蚕務を開き畢る。昼夜機を理すに縛され、つとに匹をなさんと欲するを知れ[*9]。

（子夜夏歌）

「匹」は布の意味の「匹」と配偶の意味の「匹」に双関する。布の「匹」が本句の文脈上の意味であり、配偶の意味の「匹」は上句の意味を受ける。これらは先に挙げた例と同じである。

（二十二）郎は傍の人に取らる、儂（われ）に負むくこと一事に非ず。門を摛（ひら）きて横を安（お）かず、また相い関するなし[*10]。

（子夜歌）

「関」は関門の「関」と関心を持つの「関」に双関する。

（二十三）一夕郎に就きて宿す、通夜語りて息（やす）まず、黄檗万里の路。道は苦にして真に極まりなし[*11]。

（読曲歌）

「道」は路の意味の「道」と、話すという意味の「道」に双関する[*12]。

（二十四）夜半霜を冒して来たり、我をみれば輙ち怨み唱う。氷を懐きて暗中に依る、已に寒くして亮を蒙らず[*13]。

（子夜冬歌）

「亮」は明るい意味の「亮」と許す意味の「亮」の意味に双関する。

（二十五）歓（きみ）に別れてより後、嘆声響くこと絶えず。黄檗春に向（あたり）て生じ、苦心は日に従いて長し[*14]。

（子夜春歌）

---

*1 原文：掘作九州池、尽是大宅里。処処種芙蓉、婉転得蓮子。芙蓉・夫容は中古音近似音。蓮・憐は中古音同音。憐は恋に通じる。
*2 原文：江南蓮花開、紅光覆碧水。色同心復同、藕異心無異。藕・偶は中古音同音。
*3 原文：罷去四五年、相見論故情。殺荷不断藕、蓮心已復生。
*4 原文：青荷蓋緑水、芙蓉披紅華。下有並根藕、上生並頭蓮。
*5 原文：白帝城辺足風波、瞿塘五月誰敢過。荊州麦熟繭成蛾、繰糸憶君頭緒多。糸・思は中古音同音。
*6 原文：偽蚕化作繭、爛漫不成糸。徒労無所獲、養蚕持底為。
*7 原文：将那三春看破、桃紅柳緑待如何？把這韶華打滅、覓那清淡天和。（『紅楼夢』第５回」）『紅楼夢』の訳文は岩波文庫（松枝茂夫訳）による。以下同じ。
*8 原文：見娘喜容媚、願得結金蘭。空織無経緯、求匹理自難。
*9 原文：春傾桑葉尽、夏開蚕務畢。昼夜理機縛、知欲早成匹。
*10 原文：郎為傍人取、負儂非一事。摛門不安横、無復相関意。
*11 原文：一夕就郎宿、通夜語不息。黄**蘗**万里路、道苦真無極。
*12 この部分「黄檗」も「苦」みのある植物として語りの辛さのいう「苦」の字を導く。本文（25）の記述参照。
*13 原文：夜半冒霜来、見我輙怨唱。懐氷暗中依、已寒不蒙亮。
*14 原文：自従別歓後、嘆声不絶響。黄**蘗**向春生、苦心随日長。

「苦」は黄檗が苦いという意味の「苦」と苦しい心情の意味に双関する。

（二十六）音信は弦朔に闊（とおざ）かり、方に千里の遙かなるを悟る。朝霜が白日に語る、我の歓（きみ）の為に消えるを知れ[*1]。

（読曲歌）

「消」は霜が消える意味の「消」と私が痩せていく意味の「消」（消瘦）に双関する。

（二十七）郎に別れてより後、宿に臥して頭をあげず。飛龍は薬店に落ち、骨の出るは只だ汝のため[*2]。

（読曲歌）

「骨」は飛龍の「骨[*3]」と相手を思う女性の身体の「骨」の意味に相関する。

（二十八）空しく、山中の高士－清らなる雪に向かい、ついに、世外の仙女－寂しき林を忘れえず[*4]

（『紅楼夢』第５回）

「林」は樹林と林黛玉[*5]に相関する。

以上挙げたものの多くは宋代の郭茂倩『楽府詩集』清商曲辞の中の呉声歌曲と西曲の中の例である。この例からみると、次のことがわかる。（１）双関に使うために借りてくるものはその土地にみる事物，例えば垣根や籬、梧桐、芙蓉、蓮藕、蚕糸、布の類のようなものである。（２）双関に使うために借りてくるものには歌い手がその時目にした事物、例えば子夜秋歌の中の「梧子、千年を解す」のようなものである。概ね、この修辞法を使った当初は、事物を利用して心情を示そうとするものだった。「指事借意(事物を指して心情を借りる)」と謝榛がいったのは、とても適切な解釈なのである。

以下の二つの例はこれをいっそう明らかにするものだ。

（二十九）宣和年間、童貫が燕薊に兵を動かし、破れて敗走した。ある日、家で宴会を開き、教坊から芸妓をよぶと数名がやってきたが、頭の飾り方がみな違っている。はじめの者は、額に髻があり、「蔡太師の家の者であります」と言う。次の者は、髻が片一方に傾いており、「鄭太宰の家の者であります」と言う。さらに一人、子供のように頭全体に髻を結っていて、「童大王の家の者であります」と言う。その理由を尋ねると、蔡氏は言う「太師は天子にお目見えしておりますので、これは朝天髻と申します」、鄭氏は言う「我が太宰はご先祖へのご祈願のおかげで科挙に及第いたしましたので、これは怠惰髻と言います」。童氏になると「童貫さまの軍隊の動かし方がこれで、三十六髻と申します」

（周密『斉東野語』巻十三）

「三十六髻」は「三十六計」[*6]に双関している。「三十六計」とは、「三十六計、逃げるが勝ち」という諺を前提にして、その前句のみを示して後句を導く技法を使ったもので、童貫が「破れて敗走」したことを風刺するのである。

（三十）（章宗）元妃（李氏）の勢いは盛大で，皇后と並ぶほどであった。ある日章宗が宮廷での宴会を催した折、道化者で玳瑁頭なる者[*7]が前で戯れを演じた。或るものが問うた、皇帝や国に良い徴が何かあるかと。道化が「鳳凰の現れをお聞きではありませんか」と言う。尋ねた者は「知ってはいても、詳しい話は聞いたことがない」と答えた。道化が言うには、「鳳凰の飛び方には四種類あり、それぞれに応じて異なっています。もし上に飛べば天候は順調です、下に向かって飛べば五穀は豊作です，外に向かって飛べば周囲の国々から朝貢にきます、裏（り）へ飛（ひ）して向かえば官職は上がり俸禄は増えるのです」と。皇帝は笑うばかりだった。

（『金史』后妃伝）

「裏（り）へ飛（ひ）すと向かう」は「李（り）妃（ひ）に向かう」）に双関する[*7]。

この表現法は、現在の歌謡にもみることができ、しかも実際の運用のときにはやはり事物を指すことでその心

---

*1 原文：音信闊弦朔、方悟千里遙。朝霜語白日、知我為歓消。
*2 原文：自従別郎後、臥宿頭不挙。飛龍落薬店、骨出只為汝。
*3 原文：飛龍の骨　伝統薬の中にある「竜骨」をさす。
*4 原文：空対着、山中高士晶瑩雪、終不忘，世外仙姝寂寞林。（『紅楼夢』第５回）。
*5 林黛玉は『紅楼夢』の女性主人公。
*6 現代音は「髻（jì）」「計（jì）」。中古音でも同音に分類。
*7 玳瑁頭なる者：原文は「玳瑁頭者」、玳瑁（ウミガメの一種）のかぶり物をした人物、或いは玳瑁の頭に似た頭をした人物のことと推測する。元代の『優戯録』の楊鉄崖の序文に「銭唐王曄、歴代の俳優の言辞で世間に役立つものを集め、楚国の俳孟以下、金人の玳瑁頭にいたる……」（王国維『宋元戯曲史』元戯曲家小伝に引く）とある。これは金史のこの引用文に現れる者を指すと思われ、元の当時、金に「玳瑁頭」と称された口才に富む俳優がいたと認識されていたことはわかるが、その名前の由来はよくわからない。
*8 原文は「向裏飛 xiàng lǐ fēi」及び「向李妃 xiàng lǐ fēi」。現代音同じ、中古音では類似音となる。訳文では双関を意識して無理に訳したので、日本語が少し奇妙になっている。

情を表すという状況がある。

二　被此双関

これも明らかに目の前の事物を使って気持ちを伝えようとする表現法であって、旧小説にいわゆる「桑を指して槐を責める」[*1]というものだ。この双関に用いるものは形音義すべて二つの事柄に関わる双関語である。双関語は必ずしも一つでなく、しばしばいくつかの文となる。例えば：

（三十一）こちらでは宝玉がまた、「お燗なんかしなくてもいいんです、ぼくは冷で飲むのが好きですから」というと、薛未亡人、「それはいけません。冷酒を召し上がると、お習字のときにお手々がふるえますよ。」宝釵が笑いながら「宝玉さん、あなたは毎日雑学をつめこんでいらっしゃるくせに、ごぞんじないのかしら？お酒というものは熱い性質のもので、熱くして飲むと、発散が早いけれど、冷たいのを飲むとお腹の中でかたまってしまい、五蔵でもってそれを温めることになりますから、体に毒なんです。これからはぜったいに冷酒で召し上がらないようになさらなくっちゃ。」宝玉はなるほどと思い、冷酒はやめて、さっそく暖めてこさせてのんだ。林黛玉は西瓜の種をかみ割って食べながら，口元をゆがめてにやにやしていた。ちょうどそこへ、黛玉のところの小女中の雪雁が、黛玉のために手焙をとどけてきた。黛玉は皮肉に笑いながら雪雁にいった。「誰に言いつかって、おまえはこんなものをとどけてきたの？よく心づかいをしてくれて、それはありがたいけれど、いくらなんでも、あたし、そう簡単にこごえ死にはしないわよ。」「でも、紫鵑姉さんに、きっとお嬢さまが寒がっていらっしゃるだろうから、持っていくように、といわれたものですから」。黛玉は雪雁からその手焙を受け取って、ふところに入れると、またいった。「おまえもあれのいうことはよく聞いておくれだったね。あたしがふだんおまえにいうことは、まるで馬の耳に風と聞きながしているくせに、あれのいうことだと、すぐへいこらと聞くんだね。まるで天子さまのおことばみたいに。」

（『紅楼夢』第８回）

傍点を打ったいくつかの文はみな冷酒を飲むことと手焙の二つの事件を双関させている。だから「宝玉はそれをきくと、さては黛玉、そのことにかこつけてぼくを皮肉っているんだなとすぐ気がついた」のであった。

八　引用

文中に挿入された過去の成語や物語などの一段を、引用文と呼ぶ。物語や成語を引用する場合、二種の方法に整理できる。第一は、その成語や物語の出典をどこかを示すもので、これが明示引用法[*2]である。第二は、説明もなく、単に成語や物語を自分の文章に組み込むだけのもので、これが暗示引用法[*3]である。両者の関係は譬喩における明喩と借喩に似ている。前者はその部分が引用文であることを明示し、後者は引用文を本文の代わりにして用いるのである。

一．明示引用法

（一）我々は、科学が知識上の事柄であって、愛情は感情の事柄であると信じている。知識の発達を促すためには知識を必要とし、感情を豊かにさせるには感情が用いられねばならない。しかも、感情が導くものは同質のものである。嫉妬は嫉妬を導き、怨みは怨みを導き、悲哀は悲哀を導くのであり、愛情でこそ愛情が導かれるものだ。別の言い方をすれば、もし私のあなたへの愛をあなたが得ようとすれば、あれこれ説いても無駄なことだ。あなたが誠実に私を愛してこそ、私があなたに愛情を次第に感じるようになるのだ。また、私や他の人に対する愛情もまた誠実本位なものでなければならず、あなたが私のあなたへの愛或いは他の人への愛を得ようとしてするものであってはならない。もし、あなたが私にあなたへの愛或いは他の人への愛を導こうと考えるのであれば、愛情は虚偽なものとなり、人に感情を呼び起こす力はなくなってしまうのだ。王船山は言っている、「子供を管理するなら孝たれと語るより、子供をちゃんと養う方が良い。弟を指導するなら友愛を語るより弟を寛容に扱う方が良い。婦人を管理するなら従順たれと説くよりは婦人に優しく接する方がよい。気持ちが落ち着き心が通えば、心は本来の人間性に沿うものだ。そうなれば何もいわなくても何かいったようになる。これが君子は天の道によって人を育てる、というものである」と。これは先に述べた第一の道理である。孟子は「不誠実で人を感動させた者はいない」といい「誠実の極みが人を動かさなかったことはない」と言う。これが先に述べた第二の道理である（『あなたはどこに向け

---

*1「桑を指して槐を責める」：ある人を責めながら実は他の人を責めることをいう成語。
*2 明示引用法：原文は「明引法」。以下に出てくる「暗示引用法」は、原文「暗用法」。
*3 暗示用法：いわゆる出典・典故にまで及ぶ用法。

て行く行かれるのか』[*1] 訳序）

上文中に「　　」で初めと終わりを示した部分が共に明示的引用法である。

（二）晋侯がまたまた虞を通してもらい虢国を伐った。（虞国の）宮之奇は（虞公を）諫めて言う：「虞は虢の影でございます。虢が滅びれば、虞も必ずその後を追いましょう。……諺に『車の荷枠と車台は互いに支えあい、唇がなくては歯が寒い』と申すのは、虞と虢の関係です。」

（『左伝』僖公五年[*2]）

上文中に『　　』で初めと終わりを示した部分も明示用法である。

（三）「峨眉山月半輪の秋、
　　影は平羌江水に入りて流る。」
　　謫仙人のこの言葉を誰が理解できるだろう、
　　君よ月をみたときは楼に登りその気持ちを推測してほしい。

（蘇軾「送張嘉州」詩）

上文中の二句は李白「峨眉山月歌」の初めの２句であり、これもまた明示引用法である。

二．暗示引用法

（四）丘にのぼって　見渡せば　古い都は　晩秋の　ようやく肌にしみいる寒さ　千里ゆく澄んだ長江は練絹か　緑の峰は鏃（まぶし）のよう　家路への舟は夕映えのなかを棹さしてゆき　西風そびらに　酒場の幟はためいて立つ　いろどった舟雲あわく　星河には鷺のとぶ　絵にもかけぬ　うるわしさ
　おもえば昔栄華のゆめ　きそうたを　うたてなや　門外と楼頭と　恨みをのんだこといくたびか　高きにのぼり　古きをおもえば　まのあたり　栄光と汚辱のかさなりあえる　六朝の昔語りは　ながれる水去り　つめたい霧に枯れなんとする草　なお緑　今もなお　街の女の　時々にうたうのは　ああ玉樹後庭の曲

（王安石「桂枝香・金陵懐古」詞[*3]）

文中に出てくる「澄んだ長江は練絹か」は、「澄んだ長江は静かなこと練絹のよう」（謝朓「晩登三山還望京邑」）の引用であり、「門外と楼頭」は「門外の韓擒虎、楼頭の張麗華[*4]」（杜牧「台城曲」）の引用、「今もなお　街の女の　時々にうたうのは　ああ玉樹後庭の曲」は、「街の女は知らず亡国の恨み、江を隔ててなお歌う「後庭花」」（杜牧「夜泊秦淮」[*5]）の引用であって、成語や物語を明示せずに使っているのである。

（五）春風は柳の緑の枝を過ぎること繰るがごとく、晴れた日差しは若い桃の木から赤色（の花）を蒸し開かせる。

（王安石《春風》詩）。

詩文中の「色（の花）を蒸し開かせる」については、韓愈の「桃源図」の「桃の木を植えてあちこちに花が咲く、川原はどこもかしこもまるで赤い雲が蒸し上がる」という過去の表現を秘かに用いているのだという人もいる。

以上明暗二種の引用法は、言葉を省略してその内容を利用する引用表現と、言葉も内容も共に利用する引用表現の二種類に分けられる。これまで挙げた例は共に後者であった。今度は前者の例を二つ上げよう。

（六）多いのには何ともしかたがない。……「太誓」に、殷の民は兆人であろうと心は離ればなれ、周は十人であっても心は一つ、と（いう意味の言葉が）あるが、この場合は周の方が（心を一つにしているから）多勢なのである。

（『左伝』成公２年）

（七）陽城先生はそれとも俸給のために官吏になったのか。むかしの人が、「任官は貧乏のためにはしない。けれども時には貧乏のためにする」というのは俸給のため官吏になることを言ったものである。もちろん高い位を辞退して低い地位につき、財富を辞退して貧乏暮らしをする、たとえば門番や夜まわりの者なら結構だ。……陽城先生の等級、俸禄が低くもない少なくもないことは誰がみてもはっきりしている。それなのにこんなことでよいのだろうか。」

（韓愈「争臣論」[*6]）

（八）支那に於ける王道は、覇道と対立しているようにみるけれども、実は兄弟らしいものなので、そ

---

*1『あなたはどこに向けて行かれるのか』：ポーランドの作家シェンキビッチの作品、日本では原語をそのまま移した『クオ、ヴァデス』（岩波文庫）として紹介されている。なお、王船山の語は『詩広伝』、孟子の語は「離婁上」の語。
*2『左伝』僖公五年：翻訳は平凡社中国古典文学全集『春秋左氏伝』（竹内照夫訳）による。
*3 訳文は平凡社古典文学体系 20『宋代詞集』（倉石武四郎編）に基づく。
*4 意味は「門外から韓擒虎将軍が攻め入ろうとするとき、高楼で張麗華と戯れていた陳の後主」となる。
*5 杜牧「夜泊秦淮」：翻訳は平凡社中国古典文学全集『唐詩』によるが、上の詩と関係がわかるように原文の訳語には「街の女」の語を使った。
*6 韓愈「争臣論」：訳文は筑摩世界文学全集『韓愈』（清水茂訳）による。

の先或いはその後にきっと覇道がやってくるに違いない。人民の謳歌するのは、覇道の薄くなり或いは濃くならないように望むためである。……孔子や孟子は確かにその王道を大いに宣伝したが、先生たちは周朝の臣民であったばかりでなく、諸国を周遊して活動したから、或いは官吏になりたかったためかも知れない。美しくいえば、即ち道を行うつもりで官吏になれば、道を行うに割合に便利であり、而して官吏になるためにはむしろ周朝を賞めた方が便利であるのである。しかし、別の記載をみると、その王道の元祖かつ専門家であった周朝さへも、伐紂の始めに、伯夷と叔齊とが馬をさえぎって諫め、彼らをひっぱりゆかねばならなかった。紂の軍隊も反抗し、杵が漂う程までに血を流さねばならなかった。続いては殷民が反叛し、彼ら等を「頑民」と称して、王道天下の人民の中から除いたけれども、とにかくなんだかある破目に陥った観があった。頑民一人でせっかくの王道も台無しにしてしまうのである。

（魯迅「中国に関わる二三の事柄」[*1]）

引用した三つの例はぞれぞれ原文に手が加えられている。例（六）の原文は「（殷は）億兆の夷人を授かっていたが、心からは離れ徳からは離れていた。予には乱民十人おり、心も徳も同じくしている」（『尚書』泰誓中）。例（七）の原文は、「仕えるのは貧乏のためにするのではない、しかし時に貧乏のためにすることもある。……貧乏のためにするものは、尊き位を辞して卑き位に居り、富を辞して貧しきに居るべきである、尊き位を辞して卑き位に居り、富を辞して貧しきに居るにはどのような仕事が良いか。関守や夜まわりである（『孟子』万章下）」である。例（八）の原文は「伯夷、叔齊は馬を叩じて諫める」（『史記』伯夷列伝）及び「血は流れて杵を漂わせる」（『尚書』武成）及び「成周ができあがると、殷の頑民を移動させた」（『尚書』多士）である。

言葉の引用には上述の真っ当なもののほかに、滑稽な用法もある。切り貼りして作文し、笑いを誘おうとするものだ。例えば周密の『斉東野語』（十三）に掲載されるものがそうだ。

史彌遠丞相の行政では、役人を選び官職を改める場合、その門下生から出した。彼が大きな宴会を取り仕切ったとき、役人の衣冠をつけた道化が数名出てきて、みな孔子の弟子だと称し、「我々はみな役人に選ばれました」と言う。そしてそれぞれその姓を告げた。言うには、「私は常従事です」、「私は于従政です」、「私は吾将仕です」、「私は路文学です」と。他に二人が出てきて言うには、「私は宰予であります。孔子先生は言われた、宰予によりて改めると、（こうやって身分が官職持ちに改まるのは）まさに僥倖であります。」もう一人が言うには、「私は顔回であります。先生は言われた、回や改めずと。私は徳行 / 言語 / 政治 / 文学の四科目の先頭に立ちて改めることはないのに、お前はなぜ自分だけ（官職持ちに）改まるのか？」答えるには、「私は研鑽しているので、（官職持ちに）改まるのだ。君はなぜ研鑽しないのか。」答えるには、「研鑽しないのではない、研鑽するにも、（孔子先生が）彌（いよいよ）堅くてかなわないのだ。」答えて言う「お前が改めないのは故あることだが、なぜ彌よ遠い[*2]ほうについて研鑽しないのか」と。

この諧謔の見事な巧さは、まさしく周密が「秘かな中に巧みさがあらわれ、伝えるに足る価値のあるもの」と言うところのようである。しかし、ここに引かれるものはすべて「もとの文の内容をばらばらにする」というものだ[*3]。つまり以下にみられるように切り貼りで作文しているのである。

常従事－曾子が言う「何でもできるのに、あまりできない人にも尋ねる。何でも知っているのに余り物を知らない人にも尋ねる。能力があってもまるでないようであり、十分な力を持っていてもまるで持たない人のようである。昔、私の友が常にこのように従事していた」（『論語』泰伯）による。

于従政－子が言う「本心から行いを正しくすれば、政治に従う（于従政）のに何の困難があろう。行いを正しくすることができないならば、人々を正しく導く—つまり政治をすることがどうしてできよう」（『論語』子路）による

吾将仕－孔先生はおっしゃった「ごもっとも。わたしも将来仕官（吾将仕）するでしょう」（『論語』陽貨）による。

路文学－徳行にすぐれたものに顔淵さん・閔子騫さん・冉伯牛さん・仲弓があり、弁舌に秀でたものに宰我さん・子貢さんがあり、行政手腕のあるものに冉有さんと季路、文学（季路、文学）に通じた者には子游さんと子夏さんがあった」（『論語』先進。顔淵はつまり顔回のこと。回、字子淵、従って顔淵とも称した。）による。

---

*1「関于中国的両三件事」：訳文は学習研究社『魯迅全集』８に基づく。
*2 彌よ遠い：史彌遠丞相の「彌遠」を指し、丞相の側に付くと出世することを暗示したもの。
*3「秘かな中に巧みさが表れ、伝えるに足る価値のあるもの」・「文の内容をばらばらにする」：上記の引用文の後に続く周密の言葉。

宰予によりて改める－宰予が昼間から寝所に入った……先生はこうおっしゃった、「始め私は人に対して、その言葉だけを聞いてその行いを信じたものだ。今では私は人に対して、その詞を聞くだけでなく、その行いを観察する事にしている。（宰）予に于いて、改めたのだよ（于予與改是）。」（『論語』公冶長）による

回や改めず－先生がおっしゃった、「えらい男だな回は。一碗の飯と一杯の水、普通の人ならそのつらさに堪えきれぬ所だのに、回はくじけて志望を改めず（回也不改）楽しんで暮らしている。賢哉、回也！」（『論語』雍也）

研鑽するにも彌よ堅く－顔淵さんが長嘆息して言った。「（先生は）仰げば彌よ高く、研鑽すれば彌よ堅く（鑽之彌堅）、前にあるかとみているといつの間にか後ろにある……」[*1]（『論語』子罕）による。

引用する七条は、すべて『論語』より出ている。

この二種類の引用法の中で、先掲第二の暗示用法はいわゆる出典利用の問題と最も関係が深く、もし、用い方が不適切であれば、流弊を招いてしまう。かつて新文芸が芽生えたばかりのとき、文学革命側ではその流弊を厳しく攻撃したことがある[*2]。いわゆる流弊とは、大体五項目、つまり（一）出典使用がわかり難く、理解できない、（二）出典利用が繁雑で煩わしい、（三）出典利用が浮き上がり、その真意がわからない、（四）決まり文句を短縮してしまい、不自然になっている、（五）出典の利用に失敗している、というものだった。例えば、徐陵『玉台新詠』の中に「新製連篇、なんぞ葡萄の樹にとどまらんや」とあるが、この句がなにを出典に利用したのか不明で、いまだにその出所がわからない[*3]。このような流弊は、厳しく批判されねばならない。さらに『高齋詩話』[*4]に指摘するように、王荊公の詩『桃源行』における「望夷宮中に鹿は馬と為り、秦人半ば長城の下に死す」の句中、鹿の話は望夷宮であった話ではないし、また長城を築いたのは秦の始皇帝の事でもない。しかし詩の中ではそのようにいっている、これもまた厳しく批判されることになるのである。

先掲第一の明示的引用法が中国文学の中に起こした奇妙な現象、それは全編古人の言葉によって作り上げたいわゆる「集句」または「集錦」である。集句の場合概ねは詩で、文章ではあまりみられない。詩の集句について、『王直方詩話』には王荊公に始まるといっている。『西清詩話』では、宋の初めに既にあって、まだ盛んにはなっていなかっただけで荊公が始めたわけではない、という（『苕溪漁隠叢話前集』[*5]三十五に引く）。一方清の趙吉士が集めた『寄園寄所寄』巻四[*6]「捻鬚寄奇詩原篇」に引く『稗史』の方は、「晋の傅咸が集経詩を作った……集句詩の始まりである」といっている。三説の中では、最後の説が最も信用できると思う。今、『漢魏六朝百三名家集』[*7]を調べると、傅咸に集『論語』、集『毛詩』、集『周易』、集『左伝』等の詩が幾首かあるのがみえる。その後次第に発展して盛んとなり、清朝になると黄庠堂[*8]の全集各詩体九百余首に、すべて集句でできあがった『香屑集』があらわれた。集の初めの一文さえ集句でできていて、彼の技巧を見事だ褒める人すらいるありさまだ。明示引用法から生じた腫瘍のような発展は、ここまで来るともはや先はない。

九　倣擬

風刺や嘲笑のため、既にある特定の形式を故意に模倣擬態してつくるものを、倣擬格[*9]と呼ぶ。倣擬には二種類ある。第一は文の倣擬で、すべて既成の表現に装うものである。第二は語り口の倣擬で、既成の調子で作られるものだ。

文の倣擬の例を挙げる。

（一）おえら方はもう文化にまたがって去り、ここ

---

*1 以上『論語』の訳文は平凡社中国文学大系 3『論語』による。引用文の理解のために一部語句を変えている。訳語「研鑽」は原文は「鑽」，本来は穴を開けることだが，そこから深く研究するという意味になる。

*2 新文芸への文学革命側からの攻撃：1954 年重版の『修辞学発凡』では、この部分「10 年前」の事とある。後記によればこの第五篇が実際に書かれたのは 1932 年、その 10 年前だとすれば、概ね五四文学革命運動の時期にあたる。この時期に陳望道の示す例を挙げて「用典」に強く反対した人物として銭玄洞がいた。『中国近百年文学理論批評史』第二編第四節参照（黄曼君主編　湖北教育出版社 1995）。

*3 徐陵『玉台新詠』は南朝の梁代に編纂された詩歌集。引用は、編者徐陵の序文中の言葉で「清文満筐、非芍薬之花、新製連篇、寧止葡萄之樹」中のもの。この文は対句となっているので、文の構造上前句に出典があるとすると、対句となる葡萄の語にも当然出典が予想される（例えば学習研究社刊『玉台新詠』では前句に晋の傅統の妻の「芍薬花の頌」を指摘するが、後句は未詳として一説を挙げる）。なお、『徐陵集校箋』（許逸民　中華書局 2008）では、前句は芍薬を唱う類，後句は葡萄を唱う類の複数の作品をまとめた表現とみて対句の平衡をとりそれぞれの作品例を挙げる。

*4『高齋詩話』曹慥撰。散逸。今『宋詩話輯佚』（郭紹虞輯　中華書局 1980）を参照。

*5『苕溪漁隠叢話前集』（南宋・胡仔纂集）歴代の人物を主に、各種の詩話の関係記事を集めたもの。

*6 趙吉士は清朝の人。『寄園寄所寄』は未見。

*7『漢魏六朝百三名家集』：明の張溥の編。

*8 黄庠堂『香屑集』：黄庠堂は黄之雋のこと。康熙年間の進士。『香屑集』は，唐人の詩句を集めて作った艶情詩集で序文も集句でできている。『四庫全書総目提要』では、集句の始まりを傅咸とし、この『香屑集』を「前に古人なく後に来者なき」もの評価している。

*9 倣擬格：いわゆるパロディのこと。ここでは陳望道の用語に従う。

には空しく文化城だけが残された。
文化はひとたび去ってまた返らず　古城は千年さびれたまま
専用列車は前門の駅に列をなし、不運は重なる大学生
日本軍は山海関に迫るも抵抗なく　花柳の巷には驚く人もなし
（魯迅『偽自由書』「崇実」[*1]。これは崔顥「黄鶴楼」詩：「昔人は黄鶴にまたがって去り、ここには空しく黄鶴楼だけが残された、黄鶴はひとたび去ってまた返らず、白雲はいつまでも空しく悠々たり。晴れた川に漢陽の樹が並んでくっきりみ、芳草はかおる鸚鵡洲、日暮れて郷関は何処か是なる、煙波の江上にて人を愁えしむ」をなぞったのだ。）

（二）貢父（劉攽）は晩年風疾に苦しみ、鬢や眉の毛はみな抜け落ち、鼻の骨は今にも折れようとしていた。ある日蘇軾ら数人と一杯やっていたとき、それぞれが古人の言葉を使ってふざけあった。蘇軾は貢父に戯れていう、「大風起きて眉は飛颺す、安くにか壮士を得て鼻梁を守らん。」みなは大いに笑ったが、貢父の怒りはおさまらなかった。（劉邦《大風歌》の「大風起きて雲飛揚し、威は海内に加わり故郷に帰る、安くにか猛子を得て四方を守らん」の最初と最後の二句を模倣したのである。）

（王闢之『澠水燕談録』十[*2]）

（三）春揮「私は今日の飛鞋[*3]のこの韻事によって、まえから彼のために描写しようと思っていた。この「巨屨」[*4]の二字はなかなかに宜しい。わたしはこれを借って、幾部かの書にまねて、かれを表白しようと思う。姐さんに果たしてこの雅興がありましょうか。」題花「そりゃあ結構よ。姐さんまず一つ出しなさい。」春輝「私は宋玉の九弁にならおう。独り巨屨の高翔するを見ず、乃ち卞氏の圃に墜つ（これは調子の倣擬格で次の類に入る）」。題花「私は揚雄の反離騒にならおう。巨屨蓬渚に翔る、豈凡屨の能く捷くすることあらんや（揚雄「反離騒」に「鳳凰蓬渚に翔り兮、豈鴛鵝鳥の能く捷くすることあらんや」）」。玉芝「わたしは賈誼の賦にならおう、巨屨千仞に翔って、青霄を歴て下る（賈誼「弔屈原賦」「鳳凰千仞を翔り兮、徳輝をみて之に下る」）」。小春「わたしは宋玉の楚王の問に対うるにならおう。巨屨上九千里に撃ち、雲霓を断ち、青霄に入り、杳冥の上を飛騰す。夫れ凡庸の屨、豈能く之と天地の高を料らんや（「鳳凰上りて九千里を撃ち、雲霓を断ち、蒼天を負う、杳冥の上を翺翔す、それ藩離の鷃の、豈よくこれと天地の高さを料らんや」）。」春輝「この幾句はなんて雄壮なのにまねている。」紫芝「もし雄壮なのを欲するなら、むつかしいことはない。私は荘子に、ならおう。その名を屨となす。屨の大きさ、その幾千里なるかを知らざる也。怒（はげ）んで飛ぶときは、その翼垂天の雲のごとし。この屨や、海運（うご）くときは将に南冥まで徙らんとす。—南冥は天池也。諧の言に曰く、屨の南冥に徙るや、水撃すること三千里、扶揺を搏（はう）って上ること九万里、去って六月を以て堕つる者也。（「逍遥遊」に、北冥に魚あり、その名を鯤と為す、鯤の大なるやその幾千里かを知らざるなり。化して鳥に為るや、その名を鵬と為す、鵬の背はその幾千里あるかを知らず。怒りて飛べば、その翼垂天の雲のごとし。この鳥や、海が運けば則ち将に南冥に徙らんとす。南冥は、天池なり。齊諧なる者は、志怪なる者なり。『諧』これをいいて曰く「鵬の南冥に徙るや、水を三千里に打ち、扶揺を搏ち上ること九万里、去りて六月を以て息む」）。」春輝「これはただ雄壮なばかりではなく、かつ極めてその大をいって、甚だ本題の精神を得ている。」紫芝：「私は毛詩にまねよう。巨屨颺（あが）れり、かの高岡に。大足の光れり、かの馨香に（『詩経』大雅「巻阿」に、鳳凰の鳴く、彼の高岡に、梧桐の生ゆ、彼の朝陽に）。」春輝、「馨香の二字は、是れ褒中貶を帯ぶ。反面文章、含蓄極まりなくて頗る風人の旨がある。私は礼記の「月令」にならおう。是の月や牡丹芳しく芍薬は艶に、卞圃に遊び、気球を抛って、鞋乃ち飛騰す。」玉芝「なお一句ありますか。」紫芝「赤脚（裸足）」（これも調子の模倣）というと、みな大笑い。青鈿「あなたたちは様子を変えてわたしを罵り、ただ出放題に聖人をぼうとくしましたから、何れみんなその報いは免れないでしょう。」衆人「どんな報いがありましょうか。」青鈿は舌を伸ばしまた５本の指を下に曲げて「ただおそらくは，すべて蔡に行くことになりましょう[*5]」というと、みんな聴いて一斉に笑い出した。

（『鏡花縁』第 87 回）

---

*1 魯迅『偽自由書』崇実：訳文は学習研究社『魯迅全集』７による。
*2『澠水燕談録』は北宋の王闢之の撰。当時の士大夫たちの聞き書きを記したもの。
*3 今日の飛鞋：清の人、李汝珍による小説『鏡花縁』の中での話。登場人物の彩雲が遊戯の中で毬を蹴ったとき鞋まで飛ばしてしまった事を佳話として取り上げたもの。以後の訳は藤林広超『則天武后外伝鏡花縁』（講談社 S.55）に基づく。鞋は足首までの短靴のこと。
*4「巨屨」：『孟子』藤文公上にみる「めの粗いできの悪い鞋（巨屨）もめの細かなよい鞋（小屨）も同じ値段というのでは、誰もよいものはつくりはせぬ」（平凡社古典文学大系『孟子』）の語に基づく。『鏡花縁』の登場人物の一人題花が注３の「鞋」の話から孟子の「巨屨」の話に話題を結びつけた事をふまえる。「屨」は鞋（短靴）のこと。
*5 蔡に行く：ろくでもない男に嫁ぐの意味。『論語』に基づく。

語り口（調子）の倣擬格の例

（四）ある秀才はいつも巷の講談[*1]を読むのが好きだった。その年の科挙試験にあたり、試験場で出た問題は、「子曰く、赤の斉に適くや」から「これに粟九百を与えるも、辞す」というものである。筆を執って書き始めると、その文に言う。

「聖人その時こうおっしゃった、君たちしっかり聞きなさい。子華がこの日山東を去り、金持ち然とすたすた進む。昔の言葉にあるように、雪の日炭を送るは君子、錦上花を添えるは小者。お坊ちゃまはさて置いて、官職付きの話をしましょう。官職付きとは誰あろう、堂々たる県令の原という姓の人物。扶持米得ること九百石、固持していささかも受け取ろうとはいたしません。」この答案が出ると、規範に沿わないので、劣等級に列べられた。（文は『論語』雍也篇「子華さんが斉へ使者に遣わされた時、冉先生は彼の母のために扶持米を頂きたい、と願い出られた。‥‥‥先生がおっしゃった、子華の斉へ旅だったとき、肥馬にまたがり、軽ろやかな毛皮を身につけていた。こういう諺があるよ、君子は切羽詰まれば助けもするが、有り余るのを足しはせぬ、とね。原思さんが県令となったとき、彼に九百斗の扶持米を支給しようとなされた。辞退したところ、先生がおっしゃった。「遠慮するな。お前の近隣の人たちにも分けてやったらどうかね」[*2]の一節から題材を取った一段を講談の調子で語ったもの）。

（梁章鉅『制義叢話』二十四[*3]）。

（五）燕紫瓊はいう：「紫芝さんが私に代わって笑話をしてください。わたしは特別に二杯飲みますよ。いかがでしょうか。」紫芝「もちろん代わってあげますよ。」緑雲「紫芝さんが以前にした講談はとてもよかった。ほかに宝さんが教えた小唄もあります。紫瓊姉さんが二杯飲んでるのに、どうしてしないの。」紫芝「もし普席の方が二杯飲んで下さったら、わたし講談一段語りましょう。」衆人「それは結構。私たち二杯飲みますよ。」というと女中、みんなに注いでまわる。紫芝拍子木を取り出していう、「私の語る講談はたくさんありますが、只今はまず「子路従って後る」から「その二子にまみゆ」までのこの一段を語って、みなさまにお聴かせいたしましょう。」そこで拍子木で卓上をたたいて語ります。

「みなさま、私しばらくこの書の両句の題を読みますからお静かにお聴きください。窮時に遭って師生路を錯まてり、情殷ごろなる処父子賓を留む」、また拍子木をたたいて語ります。「師匠に従って行くほどに師とはぐれて，かえって田家に宿することになりました。半生碌碌として天涯を行き、ここに到って一斉に放下します。鶏黍慇懃うちとけて、主客情意うつくしきかな。山中この夕べ嗟訝することなく、師弟永夜はなればなれになります。」また拍子木をたたいて語ります。「さても子路は、楚蔡地方で長沮・桀溺にさかねじくわされて、心中悶々として楽しみません。そのまま行くほどに道ばたをみると、田を耕すもの草を鋤くものがあって、老いたものは老いたものの仕事を、若いものは若いものの仕事をし、彼の一片の世を済うの心腸を触動して、歩くのも後れがちであります。ふと頭をもたげますと、夫子の車輌はみなくなっていました。あわてていると、道ばたに一人の老人がくるのをみました。頭には范陽の氈帽を頂き、身には藍布の道袍を着て、手には杖を持ち、杖には草を鋤く道具をつけています。子路尋ねます、「ご老人、わたしの先生に会われなかったですか」と。その老人睛（ひとみ）を定めて子路の上から下までながめて「客人、わたしがあなたをみると、肩で挑ぐこともできず、手で提げることもできず、胡麻も豆もわからないようですが、あなたの先生というのは一体誰のことですか」と、老人はそういって、杖を地面に突き刺し、道具を持って自分で田の草刈りに行きました。」また拍子木をたたいて語ります。

「みなさん、凡そ年たけ有徳の人に遭ったら、欽敬すべきであります。ですから信陵君は侯生のために轡を取り、張良は圯上の老人のために履（はきもの）を拾ったのです。そして後には王を興し覇を定めて許多の事業を成就しました。子路は聖門の高弟で識見のある人でありました。老人のいうのを聴いて、彼は手をこまねき身をかがめて一方に立っていました。その老人は田の草を刈って子路に向かっていいました。「お客さん、夕暮れになりました。宅はここから遠くはありません。泊まっておいきなさい。」子路「恐れ入ります。」そこで老人は前に子路は後ろに従って直ちに、門首に至り、遠慮しいしい中堂にくると、鶏を料理してご飯を炊いて歓待してくれました。そして彼の二人の子供を呼びますと、兄は先に弟は後

---

*1 巷の講談：原文は「盲詞」、衆向けの説唱文学のこと。多くは盲人の芸人が唱って聞かせたのでこの名がある。

*2 論語の訳文は平凡社古典文学大系３所収に基づく。訳文の「県令」は『論語』の原文は「宰」、基づいた訳文は「執事」とするが、ここでは引用文に沿って「県令」に改めている。

*3 梁章鉅は清の人、『制義叢話』は当時の科挙に用いられた八股文に関する逸話や伝聞を集めたもの。この文は『韻鶴軒雑著』の中からの引用として『制義叢話』に掲載するもの。

に礼儀正しく子路に会いました。ああ、可憐なる子路、半生江湖に往来して，誰からも歓待されるということはありませんでした。今日ご馳走は豊かではありませんが、かえって慇懃に歓待を尽くされ，たらふく食べて泊めてもらったのでした。正にこれ「山林唯識る天倫の楽しみ、廊廟空しく懐う済世の憂へ」というところですが、その老人、姓は何、名前は誰か、先生が会われたか会われなかったかはまたのことにして。」みんな聴いて，一斉に「好かった好かった」とほめそやして酒を飲んだ。（講談が基づいた原文は以下の通り。子路さんが先生の一行から後れて、杖で竹かごをかついで行く一人の丈人に出遭った。子路さんが尋ねた。「あなたは先生を見かけませんでしたか」。老人がいった。「己の手足を動かさずには五穀の世話はできん。誰が先生だというんだ」。そのままその杖を突き立てて草取りを始めたので、子路さんは手をこまねいて立っていた。老人は子路さんを引き留め，その晩自分の家に泊まらせ、鶏をつぶし黍飯を炊いたりなどしてして食わせたうえ、二人の息子を引き合わせた。『論語』微子[*1]）

（『鏡花縁』第83回[*2]）

（六）八股文の中にもいわゆる墨派というものがある、凡庸劣悪ではその右に出るものはない。科挙の墨巻を題材として、その文調を使って内容をすり替えあざ笑うものである。その文にいう。

天地とは宇宙の乾坤であり、吾が心は実にその懐にいだかれるもの。久しきかな、千百年はもはや一日にあらざるなり。往事を遡り思いを致さんとすれば、記録を調べ詩書の典籍を朗唱せざるなし。元后は即ち帝王の天子、蒼生は百姓の黎元、近きかな、億兆民は已に一人にあらず。時制に載り世に用いられんとして帝座を仰ぎて楼廟の朝廷に登らん。

屋上に屋を重ねる重複のさまは、今のいわゆる「音調を美しく整える」派でもこれには後れを取るありさまだ。（梁紹壬『両般秋雨盦随筆』三[*3]、梁章鉅『制義叢話』二十四）

このほかにさらに上述の二つの形式を利用したものもある。例えば魯迅の風刺詩「我失恋[*4]」（『野草』）がそうだ。魯迅がこの擬古形の新打油詩[*5]を作ったのは、当時の「辛い、辛い、私は死にそうだ」等の陳腐で頽廃的な失恋詩を風刺嘲笑するためだった。この詩を作った作者の気持ちは、『三閑集』「私と語絲の始終」を参照するならば、後に置く張衡「四愁詩」にならって作ろうとしたことになる。

わたしの愛する人がいるのは山の中腹。
会いにいきたいけれど山は高く、
頭をたれてすべもなく涙できものをぬらす。
恋人がわたしに蝶の模様のハンカチをくれた、
お返しにあげたものはなに－みみずく。
それっきりあの人はふりむきもせず、
どうしたことかと　わたしをうろたえさせる。

わたしの愛する人がいるのは賑やかな町なか。
会いにいきたいけれど込みあって、
頭をあげてすべもなく涙で耳をぬらす。
恋人がわたしにつがいの燕の絵をくれた、
お返しにあげたのはなに－氷糖壺盧（ビンタンフール）。
それっきりあの人はふりむきもせず、
どうしたことかと　わたしをぼんやりさせる。

わたしの愛する人がいるのは川のほとり。
会いにいきたいけれど水は深く、
頭をかしげてすべもなく涙で襟をぬらす。
恋人がわたしに金の時計の鎖をくれた、
お返しにあげたのはなに－熱さまし。
それっきりあの人はふりむきもせず、
どうしたことかと　わたしを神経衰弱にさせる。

わたしの愛する人がいるのあの屋敷のなか。
会いにいきたいけれど自動車がなくて、
頭を振ってすべもなく麻のように涙を流す。
恋人がわたしにバラの花をくれた、
お返しにあげたのはなに－やまかがし。
それっきりあの人はふりむきもせず、
どうしたことかと－彼女の勝手にさせろ。

張衡「四愁詩」の原文は以下の通り。

わたしの愛する人がいるのは、帝の祭りたまうあのはるかな太山の中、会いにいきたいけれど、梁父の山の険しさを通らねばならぬ、身をそばめつつ東の方をながめていると、なみだがあふれでて便りの筆をぬらす。恋人

---

*1『論語』微子篇：微子篇の翻訳は平凡社古典文学大系３『論語』による。
*2『鏡花縁』の翻訳は先掲書による。
*3 この文『制義叢話』からの引用で、梁応来からの話として記録されるもの。梁紹壬の手になる『両般秋雨盦随筆』に掲載される文は前後に異動がある。
*4「我失恋」：以下の訳文は学習研究社『魯迅全集』３による。
*5 新打油詩：打油詩とは平仄等の内部様式にこだわらない古典形式の詩を指す。

がわたしにつかをこがねでかざった一ふりを送ってよこした、お返しにあげるものはなに、それには見事な美しい玉。だが道が遠いのでとどけるによしなく、ただたったまま心にたゆとうだけ、どうしてこんなに憂いの思いをいだきつつ、心はいたみわずらうのであろう。

わたしの愛する人がいるのは、そのむかし舜帝が遊んだというあの南の桂林、会いにいきたいけれど、湘水の深いところを越えねばならぬ、身をそばめつつ南の方をながめていると、涙できものの襟をぬらす。恋人がわたしにこがねに値する珠のような美しい石を贈ってよこした、お返しにあげるものはなに、それには対になった玉の皿。だが道が遠いのでとどけるによしなく、ただたったままなげき悲しむばかり、どうしてこんなに憂いの思いをいだきつつ、心はもだえいたむのであろう。

わたしの愛する人がいるのは、そのむかし西伯が治めたというあの西の漢陽、会いにいきたいけれど、険しい隴阪の長い道を越えねばならぬ、身をそばめつつ西の方をながめていると、涙がきもののもすそをぬらす。恋人がわたしに貂の毛で作ったきものを、贈ってよこした、お返しにあげるものはなに、それには隋侯が得た明月の玉。だが、路が遠いのでとどけるによしなく、ただたったまま行きつ戻りつするだけ、どうしてこんなに憂いの思いをいだきつつ、心はむすぼれるのであろう。

わたし愛する人がいるのは、古えの顓頊の帝位であった雁門、会いにいきたいけれど、雪が乱れ降る中を通らねばならぬ、身をそばめつつ北の方をながめていると涙が手にしたきれをぬらす。恋人がわたしに五色模様のおりものを贈ってよこした、お返しにあげるものはなに、それは青い玉でつくった机。だが路が遠いのでとどけるによしなく、ただたったままいよいよ嘆くばかり、どうしてこんなに憂いのおおきをいだきつつ、心は嘆きうらむのであろう[*1]。

十　拈連

甲・乙の二種の事項の話が続くとき、甲の話の内容に沿った言葉を巧く使って乙の事項の内容を表現するもの、これを拈連表現という。この拈連の修辞法は、甲の事項の話が前に来ても後ろに来ても，共に用いられる。

（一）この男は何をするにも子供の遊んでいるような気になっている。……役所での仕事は笑談ではない。政府の大機関の一小歯車となって、自分も回転しているのだということは、はっきり自覚している。自覚していてそれを遣っている心持ちが遊びのようなのである。

（魯迅訳『現代日本小説』遊戯[*2]）

（二）紅燭よ！
　　準備はできた、燃え上がれ
　　燃えよ！　燃えよ！
　　燃えて破れ世の人の夢を
　　燃えて沸かせ世の人の血を
　　彼らの霊魂も救い出せ
　　彼らの監獄も打ち破れ

（聞一多『紅燭』[*3]）

（三）恋し扉の、夢とざされず、思いのままに、天駆け繞る。

（趙令畤「錦堂春」詞[*4]）

（四）夜じゅう吹き続いた東風、枕辺に吹き散らかされる愁いは幾ばくか？鳥の声が聞こえはじめるころ、明け方のうすぎぬのカーテンの中を夢は巡る。

（曽允元「点絳唇」詞）

（五）松は蒼い崖の上に老い、蘭は碧い渓流のほとりで枯れてゆく。隣の家から響く笛の音をねぎらおうとは思えない、昔の悲しみを吹き起こすからだ。

（李徳裕「無題詩」）

（六）さかづき手に　耳傾ける水調の曲　うたた寝は醒めたものの　愁いは醒めず　ゆく春よ　こんどはいつもどってくれるやら　たそがれの鏡　うつろう面影　過ぎた日のことは遙か遠く　むなしく思い出されて。

（張先「天仙子」詞[*5]）

（七）門を出て万里の客となった君たちは、途中、良い友にであった。ものもいわぬ先からその人に心が酔ってしまって、酒杯のやりとりをするまでもなかったのだね。

（陶潜「擬古」９首の一[*6]）

（八）離別の愁いをたたき割るように、うすぎぬの窓の外では風が緑の竹を揺らしている。あなたが去った後は簫を吹く声も絶え、高殿に立つのは私一人。目の前の晩春の夕暮れにたえられず、遠くには重なる山々の緑。寄せ来たる一通の手紙を、また初めから読みなおす。

（辛棄疾「満江紅」詞）

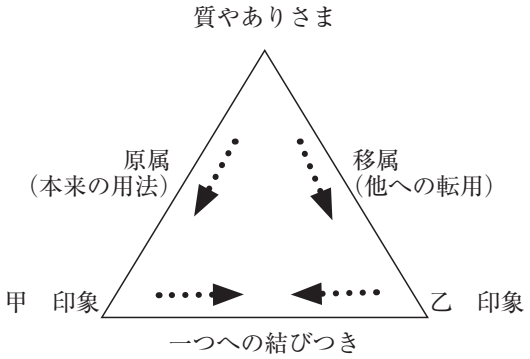
---

*1 張衡は後漢の人。「四愁詩」の訳は筑摩書房世界文学大系 70『文選』掲載のものを利用したが、魯迅の詩文訳をもふまえた。
*2 魯迅訳『現代日本小説』遊戯：森鴎外の作品「遊び」を魯迅が中国語に訳したもの。日訳は岩波書店『森鷗外全集』7 掲載のものに基づく。
*3 聞一多「紅燭」：1923 年初版の詩集『紅燭』の序詩「紅燭」の中の一節。
*4 趙令畤「錦堂春」詞：訳文は平凡社世界名詞集大成 18 所収『詞選』（阿部正次郎訳）による。
*5 張先「天仙子」詞：訳文は平凡社中国古典文学大系『宋代詞集』による。
*6 訳文は岩波文庫『陶淵明全集』（松枝茂夫 / 和田武司訳注）による。

以上例（一）から例（六）までは、他の事柄を先に置き、それが導く言葉を後ろに置くもの。例（七）と（八）は，その逆である。

十一　移就

甲と乙との二つの印象が繋がって一緒になる場合、作者が本来は甲に属す印象の質やありさまを乙の印象へと移動させたもので、これを移就表現という。移就法の中のそれぞれの成分の関係は、以下の図表のごとくである。



よく見かけるものは、概ねのところ人間の性状を人間ではない或いは未知の事物に移し替えるものである。

（一）私の車はゆっくりと心地よい緑の林を走り抜け、かの日差しのもと花が盛んに咲く山谷を通りすぎた。
（ハイネ『詩歌集』抒情間奏曲。「心地よい（快楽）」のは、本来「私」のことだが、緑の林に属すものとして移し描かれている）
（二）深夜三時頃である。自分は床の中に目醒て居ると何処か遠くで兵隊の吹く喇叭が悲しく聞へた。何の為に今頃吹くのだらう。……自分は屹度郊外で演習かなにかしてゐるのではないかと思った。自分はすぐ昼間の疲れも回復しない眠たい床から起こされて郊外へ引張り出された兵卒に同情した。
（「深夜の喇叭」[*1]　ここにいう「眠たい」はそもそも兵士のものだが、ここではベッドに移属されている。）
（三）凌姓は昔の役職に基づく姓であり、呉の時代には雄姿を誇った。今や富春の河辺一帯は寂寞となり、英気はそこに集まっていた。
（柳宗元「哭連州凌員司馬」詩。寂寞たるのは人の感情に属すことであるが、ここでは富春の河一帯のこととして移して用いられている）
（四）明日重ねて訪れる石頭への路、酔った鞍に一緒に続くのはどなたやら。
（陸遊「過采石有感」詩。酔うのはそもそも陸遊だが、ここでは鞍のこととして用いられている）
（五）風が吹き帆をあげる時分、ヒューヒューと別れの襟を冷たく吹きます、見送りはもう結構、今夜は月も寒々としておりますご自愛を。
（王修微「如夢令」詞）
（六）相如は秦王に趙城と取り替える気持ちがないのをみると……璧を持ち柱によりて立ち、怒った髪は冠を突き上げる。
（『史記』藺相如伝）

このほか、「情書」「病院」などの類も、この修辞法に属すものだ。

（以下続編）

付録

双関、引用など五種の辞格研究の展開

霍四通　（復旦大学中文系副教授）

今回の訳文には五つの修辞法（辞格）が含まれる。即ち、双関、引用、倣擬、拈連及び移就である。この５つの修辞法（辞格）は『修辞学発凡』の中ではみな「材料上の辞格」[*2]に属すものだ。しかし、現代言語学の視点からみれば、やはりそれらは区別して扱う必要がある。『修辞学発凡』の中の 38 の修辞法、また修辞学史上に提起されてきた数百に及ぶ修辞法は、現在基本的に３種類に分けられる。第一に、世界を認知する領域に関わる修辞法。第二に、言語知識を利用した修辞法。第三に言葉を引用する修辞法である。この第五篇で論及する九種の修辞法のうち、譬喩は異なる事物の間に相似性の関係を打ち立てる修辞法であり、明らかに世界を認知することと関係がある。一方借代の方は、例えば「魯迅を読む」という文中で「魯迅」の語が「魯迅の作品」に代わって使われるように、新しい言葉の用法を探りまた創り出す

---

*1「深夜の喇叭」：魯迅訳『現代日本小説』に翻訳掲載された千家元麿の「深夜の喇叭」。日本語文は、国会図書館公開の千家元麿の原文資料に基づく。中国語の訳文では当該箇所を「渇睡（眠りに渇いた）」と訳している。
*2「材料上の修辞法」：陳望道は各種の修辞法を甲・乙・丙・丁に分類し、甲類を材料上の修辞法として、「譬喩」「映襯」「模状」「双関」「引用」「倣擬」「拈連」「移就」を五篇で説明する。なお、乙類は「情趣上の修辞法」として六篇で、丙類は「語彙上の修辞法」として七篇で、丁類は「章句上の修辞法」として八篇でそれぞれ解説している。（福岡大学研究論集 A11（２）2011「陳望道《修辞学発凡・第五篇訳注》参照）

もので、言語知識と関係する。

これと同様に、今回の訳注に含まれる双関、移就及び拈連も我々の言語知識と密接に関わるものだ。一方引用及び倣擬は、前人の言葉に対する加工に関係する。

以下、この五つの辞格に対する現代修辞学の研究状況を順番に紹介して行きたい。

まずは双関から。この修辞法は近年重視されている。ご存じのように、文革が終わると、中国の修辞学は迅速に回復、発展、繁栄の段階へと進み、そのまま20世紀90年代まで続いた。この段階になると、百を超える新修辞法が前後して「発見」された。しかしながら、修辞学史が既に証明するように、修辞法の数が急激に膨張してから後は修辞学の研究はしばしば衰えて行くものである。従って、修辞法研究の表面上の繁栄を透してその背後に隠れる危機を見て取った少なからぬ学者は、修辞法の体系をしっかり整理して、数は少なくても範囲が広くて説得力のある強い基本的な修辞法について深く研究することで、修辞学研究の持続と健康な発展を推し進めようと訴えた。多くの学者は双関こそこのような基本辞格の一つと考えている。双関は少なからぬ辞格と全域において或いは部分的に重なるという現象を持っているからだ。例えば、反語は双関語の中でも特殊な形式だが、表と裏の二つの意味が正反対になっているに過ぎない。

陳望道は、双関が「一つの言葉で同時に二つの異なる事柄を導くもの」だと言う。当代の学者にとっては、双関が只に「二つの異なる事柄」ばかりだと狭義に理解する事はできない。杜甫の名句「正に江南の好風景、落花の時節また君に逢う」（「江南逢李亀年」）のようなものでは、その中の「落花の時節」とは春を示し、また李亀年晩年の不幸及び杜甫本人の不遇感を兼ね示しており、さらに唐王朝の衰退もまた暗に示している。従って、同時に四種の事柄を導きうることにもなるからだ。

陳望道は双関を「表裏双関」と「彼此双関」の二種に分けた。現代の学者たちは少なからぬ新しい区分法を提示している。ある学者は「双関」を「諧音双関」と「意義双関」に分けており（張弓）、「借義双関」、「諧声双関」、「対象双関」に分けた学者（倪宝元）、「諧音双関」、「詞義双関」、「句義双関」に分けた学者（沈謙）、「直接双関」と「間接双関」に分けた学者（王徳春、陳晨）、「諧音双関」、「語義双関」、「語法双関」に分けた学者（王希傑）もいる。この十年間でも、新しい区分が依然次々と提示されている。例えば語用学の角度から「双関」を「句内双関」と「句際双関」の二種に分ける者もいるし、語義透明度の視点から、「双関」を「透明双関」、「半透明双関」及び「不透明双関」の三種類に分ける者もいる。

中国の言語学者は近年主にポール・クライスの「協力の原理」を用いて双関の現象を理解しようとしている。「協力の原理」には以下の四種の原則がある。「量の原則」、即ちそこに示される情報はコミュニケーション上求められるものであり、多くてもならず少なくてもならないこと。「質の原則」、即ち情報は真実でなければならないこと。「関連の原則」、即ち情報は関連するものや関係するものでなければならないこと。「方式の原則」、即ち情報は明晰でなければならないことである。双関が方式の原則に違反するものだと考える学者もいれば、四種の原則それぞれに違反すると考える学者もいる。その後に起こった「関連性理論」では「関連の原則」に焦点を当てた。言語コミュニケーションでは一定の思考規律に従って認知活動が進められるもので、人間は認知の場合最も関連の強いものへと向かう傾向を持つが、言語コミュニケーションでは最も望ましい関連に向かう傾向があるというのである。この数年少なからぬ学者がこの理論に従って「双関」の研究を続けている。

文学研究者は実際の作品の読解のなかで双関の研究に論及する。例えば、銭鍾書の『管錐編』では、屈原「離騒」中の一句「私は蘭をたのみになると思っていたが、……椒はひたすら媚びて放縦[*1]」の中の「蘭」と「椒」に「双関」かあるかという問題に議論を進めている。一方周振甫は『詩話例話』に「穿鑿を慎む」という一節の中で、王維の「終南山」の詩に対する古人の双関による解釈について以下のように指摘する。

> （1）『唐詩紀事』に言っている。ある者はこの詩が時代を風刺しての作だとして、「太乙天都に近く、連山海隅に接す」とは、勢力が盛んで朝野に盤踞する事をいうのだ。「白雲回望すれば合し、青靄看に入ればなし」とは、表面だけがあって内実がないことをいうのだ。「野を分かちて中峰に変じ、陰晴は衆壑殊にす」とは、恩沢が偏っている事をいうのだ。「人の処宿に投ぜんと欲して、水を隔てて樵夫に問う」とは、禍の深いことをいうのだと説くのである。この説はうがち過ぎだ。

周氏はこの説は牽強付会の主張であって、全体的に詩篇をみれば意味を成さないと考えたのであった。

次は引用と倣擬について。

この二種の修辞法は、「言葉の遺産」を利用してできあがる修辞法だ。言葉の遺産とは、言語文化の礎石であり、我々はそれを借りて自分の思想と感情を表現する宝の倉である。中国の近代修辞学では言葉の遺産の利用を非常に強調していた。例えば陳望道は、「修辞に用いられるのは言語や文字表現の習慣及び体裁や形式の遺産

---

*1 訳は『詩経訳注・楚辞』目加田誠著作集第3巻（龍渓書社）による。

である。即ち言語や文字表現のすべての可能性なのだ。」（『修辞学発凡』第一篇「引言」）ここにいわゆる「遺産」とは、実のところ「言葉」の遺産を指しているのは以下（２）を見れば分かる。

（２）先に「言語や文字表現のすべての可能性だ」と述べたが、いわゆる言語や文字表現の可能性というものは、半分はその言語の習慣性である。もう半分は体裁や形式だ。例えば先に触た藏詞は、遺産を利用した修辞法の一つだ。このほかに、例えば引用、例えば倣擬なども遺産を利用する。このような遺産を利用する修辞法は、以前はずいぶん盛んに行われた。しかし、みな古人の成句や物語の引用ばかりであった。一般にはこれを「用典（典故の利用）」と呼ぶ。用典は連想する内容を作り上げるものだが、しかし脇役が主役に取って代わってしまい、美意識の純粋な境地を壊してしまいやすい。時には、何が言いたいのか不明にさせてしまうことすらある。（『修辞学発凡』第二篇「言葉の梗概」）

簡単に言えば、陳望道が指した「遺産」とは、主に言葉の形式で残された遺産であって、それは時間の篩にかけられて積み重なった典故に他ならなかった。これらの遺産の利用については、以前は主に「用典」の上に現れていたのである。

当代の学者は文化遺伝子論を利用して「引用」や「倣擬」などの修辞現象を説明しようとしている。文化遺伝子（ミーム）の語は、リチャード・ドーキンスが『利己的な遺伝子』の中で使ったものだった。彼は「遺伝子」が生物進化の基本単位であって、生物体（人）は遺伝子が自分自身を伝えさせ繁殖させる「生存機器」に過ぎないと考え、文化領域でも遺伝子に似た文化遺伝子があると考えたのだ。

例えば、ポピュラー音楽の「感覚に従って行こう（原文：跟着感**觉**走）」が流行すると、しばらくの間に、「感覚に従って行こう」が流行語に成った。これはそもそも情感の描写に用いた言葉だが、様々な場面で使われて、「市場は感覚に従って行こう」、「企業経営は感覚に従って行こう」等の多くの表現が現れた。また、例えば連続テレビドラマの「勝手に君を愛す」の放映成功に従って、「勝手に君を愛す（原文：**爱**你没商量）」という表現が瞬く間に流行して、あちらこちらに使われた。こればかりではなく、「勝手に君を愛す」に続いて、こんどは「勝手に君からぼったくる」、「勝手に君をだます」、「勝手に君を罰す」「勝手に君を餌食にする」、「勝手に君をからかう」「勝手に君を惑わす」「勝手に君をクビにする」など多くの倣擬（パロディ）表現もある。これらの流行語或いは形式はまるで生物学上の自己複製遺伝子のごとく、次から次へと伝えられて、それによりその生命を維持していているようだ。我々自身はこれらの文化遺伝子を伝える道具に過ぎないことになる。

第三は拈連について。

拈連は、「甲の内容にふさわしい言葉で乙の内容の観念を表す」という修辞法である。『修辞学発凡』に挙げられる例証をみると、この修辞法は主に動賓構造[*1]の中に現れる。例えば、「離別の愁いをたたき割る」（例八）がそうだ。

拈連の現象は当代の語法学研究でかなり重視されている。語法学の観点からすれば、拈連は動詞の用法の拡張に過ぎない。一般的にいって、動詞とそれが組み合わされる体言要素（目的語）との間には語義による一定の制約と選択の関係がある。しかしながら、伝達上の必要性から、このような選択の関係はしばしば破られ、動詞に組み合わされる体言要素は語義的にいってしばしば多様化という特徴を示す。　例えば次の（３）ようなものだ。

（３）a. 彼女は彼に一冊本を与える。
　　她给他一本**书**。（具体的なものを渡す）
　b. 彼女は彼に一言与える。
　　她给他一句**话**。（情報を伝える）
　c. 彼女は彼に一発ビンタを与える。
　　她给他一个耳光。（行為を加える）
　d. 彼女は彼に一助けを与える。
　　她给他一只手。（援助の提供）
　e. 彼女は彼にしっかりした信念を与える。
　　她给他**坚**强的信心。（心の慰め）
　f. 彼女は彼に自由を与える。
　　她给他自由。（態度を保証する）

以上のものは語義のレベルで意味が拡大して行くものに過ぎない。しかし中には動詞にその目的語の種類を増やさせて、動詞の語法的な性格に変化を起こさせるものもある。

（４）泣いて何の役に立つ？泣いて金を手に入れられるのか？
　　哭有什么用？能哭来**钱吗**？

目的語を取らない動詞（自動詞）の「泣く（哭）」がここでは目的語を持っている。従って句法レベルでも拡張（つまり他動詞に変わる）が起きていることになる。

同一の動詞がいくつかの動詞目的語結合の中で連用さ

[*1] 動賓構造：漢語の句型の中の動詞＋賓語（広義の目的語）構造のこと。

れるとき、しばしば拈連の現象が生じる。例えば、

（5）価値の保証をせず元金の保証もしないのだから利子などはさらに未知数。
　限り無い希望に満ちた長期の賞品なし貯蓄。
あなたのお金を貯めあなたの気持ちを貯めあなたの愛を貯めよう。
あなたの心を蓄えあなたの血を蓄えあなたの汗を蓄えよう。
（陳顕栄『都市のスキャン』「子供」）

不保**值**不保本利息更是未知数 / 充**满**无限希望的**长**期无**奖储**蓄 / **储**你的**钱储**你的情**储**你的**爱** / 蓄你的心蓄你的血蓄你的汗。

（6）「路の両側には木は生えず、草は生えず、只だ家が生える」これが、昔の広州が我々に与えた印象だった。（白剣峰「富裕になってからの新たな追求」）
　“**马**路**两边**不**长树**，不**长**草，只**长**房子”，**这**是昔日广州留**给**人**们**的印象。

上掲（5）の「貯蓄」の目的語は「金」であるが、文脈の中で「貯」と「蓄」に分け、抽象的な意味の多くの言葉と組み合わせている。（6）の「家が育つ」も通常は使わない言い方だが、動詞を続けて使われるとそこに慣性が生まれ、最後の言い方ではその慣性の勢いでこの動詞が使われている。

拈連のなかには動詞と補語の結合の中で起こるものもある。主に結果補語において現れる。この補語は賓語（目的語）と近接しており、動作行為の結果である各種の様子を表現する。動詞の後ろにはしばしば「出」「来」等の言葉が添加される。

（7）街に入るや腰鼓が鳴り響いた。…腰鼓を一打ちすれば、まるで公正さ、道義性及び富を打ち出すかのようである。（王蒙「胡蝶」）
　一**进**城就响**彻**了腰鼓。……而一敲腰鼓，仿佛就会敲出公正、道**义**和**财**富。

なぜ動詞本来の用法を変えてまで「拈連」を使う必要があるのか？それは特定の目的語を際立たせるためだと考えられる。例えば、

（8）杯の中には熱い米酒が満杯に注がれ、また妻の思いやりと優しさが満杯に注がれた。（王嘉祥「黙契を訪ねる」）
　酒盅里斟**满滚热**的米酒，也斟**满**了妻子的体**贴**和温柔。
（9）豆腐を炒めて焦がし、卵を炒めて灰とし、青菜を煮てぐたぐたにしても、しかし君は食べねばならない、これは料理を食べるのではない、気持ちを食べるのだ。（張宇「太陽に晒す」）
　把豆腐炒黑，把**鸡**蛋炒灰，把青菜煮成了**软**泥，但你得吃，**这**不是吃菜，**这**是吃感情。

例（8）の中の「満杯に注ぐ」のそれぞれの目的語には「米酒」と「妻の思いやりと優しさ」が置かれ同等の位置づけであるが、そのねらいは明らかに後者を際立たせることだ。その次の例はここ数年のインターネット言語で流行の形式で、即ちまず正常の組み合わせ形式を否定することを下敷きとして、それによって「拈連」形式の組み合わせ「気持ちを食べる」を導き出す、目的はやはり「気持ち」を際立たせることなのである。

最後は移就について。

移就と拈連はしばしば一緒に取り上げられる。両者は共に言葉の移動による修辞法だからだ。移就とは、別の事物にふさわしい修飾語をこちらの事物の描写に移して修飾に使う修辞法である。拈連との違いはどこにあるのか。『修辞学発凡』の挙げる例によれば、移就とは名詞を被修飾語とする偏正構造[*1]が基本的なものである。従って、移就は偏正構造に限られるものだと以前は考えられてきた。例えば「歓楽の小河」「悲愁の歳月」などである。しかしながら、漢語の中でこのような連体修飾語を名詞に加える構造は、簡単に主語述語構造に変換できる。従って、当代の学者の中には主述構造の一部分も「移就」とする者もいる。例えば、以下の「移就」法の修辞は「青色の六月」から構造を変えてできたものだ。

（10）六月はなんて青いのだ
　　青くてまるで海のようだ　（傅天琳「六月」）
　六月那么**蓝**
　蓝得似海

このほかに、偏正構造には動詞を被修飾語とする状中構造もあるため、人によっては連用修飾語形式の偏正構造を移就だと見なす。例えば、

（11）私は考えた、これからは怯えず、また逃避はせず、美しいように（美しく）私の仕事をしようと。（賈平凹「残佛」）
　我想以后我不会怯弱，也不再逃避，美**丽**地做我的工作。

---

*1 偏正構造：漢語の中の修飾語＋被修飾語という関係の構造。日本語では連体詞＋体言及び連用詞＋用言の構造がこれにあたり、漢語では、ともに偏正構造となり前者を定中構造、後者を状中構造とよぶ。

「美しい」は明らかに「仕事をする」やり方や情感ではない。ここでは、「美しい」の語義に拡張が起きている。こうなると、動補構造[*1]の中にも自然に移就法と見なされるものが出てくる。

(12) どんなときでも彼は口笛を吹く、吹くのは「若い友達よ出会おう」の曲だ、この曲を幸福にまた満ち足りたように吹くのだ。（石鍾山「二〇年前の暴行事件」）

有事没事他就吹口哨，吹的是《年**轻**的朋友来相会》，把一支曲子吹得幸福而又**饱满**。

当代の学者は主に認知言語学の概念ブレンド理論によって移就を研究している。概念ブレンドとは人間が思惟と活動を行うとき、とりわけ創造性のある思惟と活動を進めるときの認知過程のことで、多くの言語現象に説明力を持つ。例えば、

(13) 君は李白と共に彼の「杯をげて明月を邀び、影に対して３人となる」という孤独と開放感を感じ取ることもできれば、また李清照と共に身を「雁が人字形に飛んで戻ってきて、月は西楼に満ちる」という境遇の中に置き、これを「どうして愁の一字だけで表現できようか」という辛さを味わうこともできる。（王小薇「起点」）

你可以和李白一起感知那“**举**杯邀明月，**对**影成三人”的孤独与豁**达**;**还**可以和李清照一同置身“雁字回**时**，月**满**西楼”的情境中，体味那“怎一个愁字了得”的凄苦。

当代の人々がどうして故人と一緒に「感じ取」ったり「共にいる」事ができよう。これは「当代」と「古代」の二つのメンタルスペースがブレンドされてできあがった一つの新しい空間で、この空間の中で時空を超えた対話や精神の交流が可能となるのだ。

学者は移就の修辞の認知システムも人類が言語加工過程で概念をブレンドさせるところから始まったと考えている。『修辞学発凡』が挙げる「車はゆっくりと心地よい緑の林を走り抜けた」（例一）を例にすると、この創造的な表現形式は、二つの空間即ち「心地よい我」と「緑の林」をブレンドして一つの共同空間、即ち「心地よい私が車に乗って緑の林を通りすぎる」という空間を作り、その後に手を加えてできたものなのである。

---

*1 動補構造：漢語の中の動詞＋補語の構造。動詞の後ろにその動作の結果や状態を示す表現が置かれ動詞の補語となっている構造。